

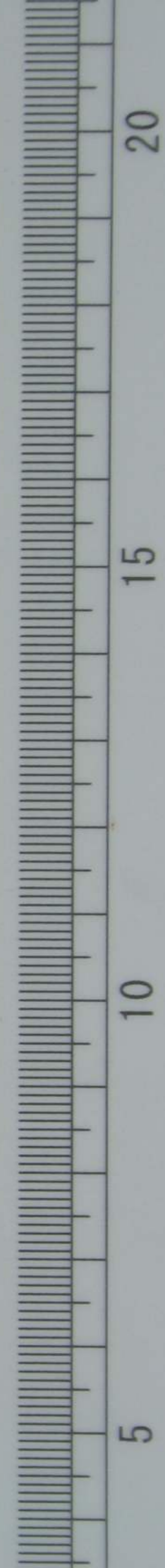
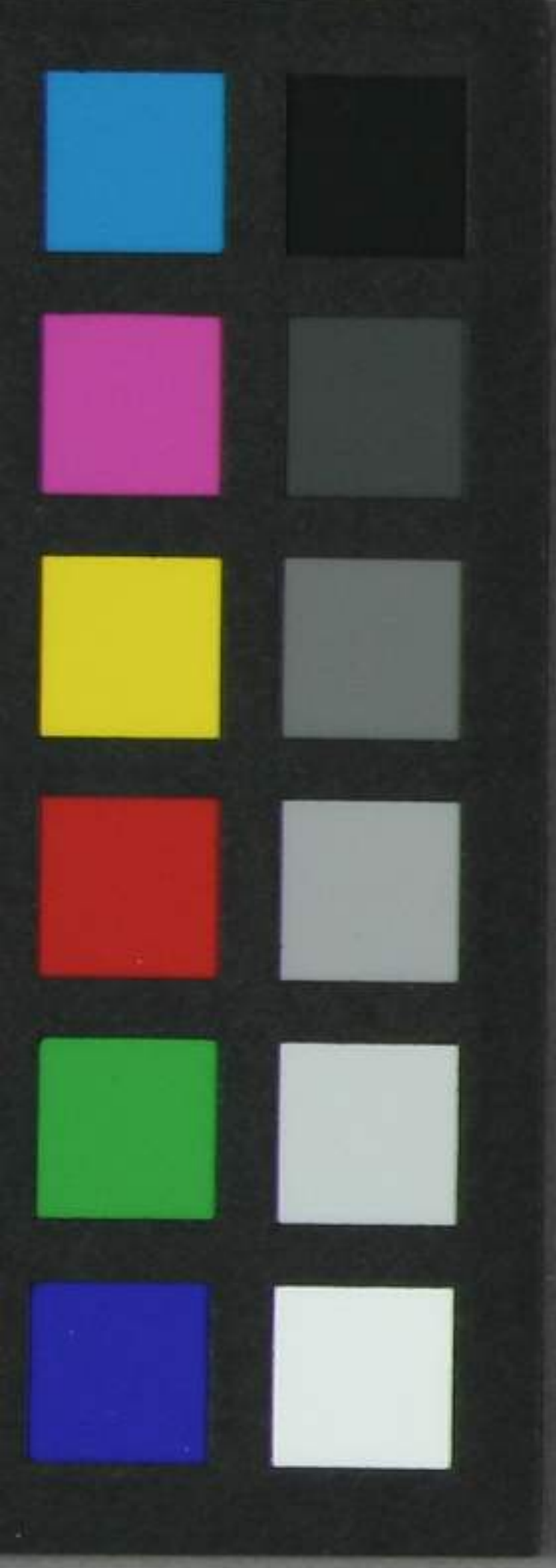
集 歌

河 山

園 薰 子 金



版 藏 社 潮 新



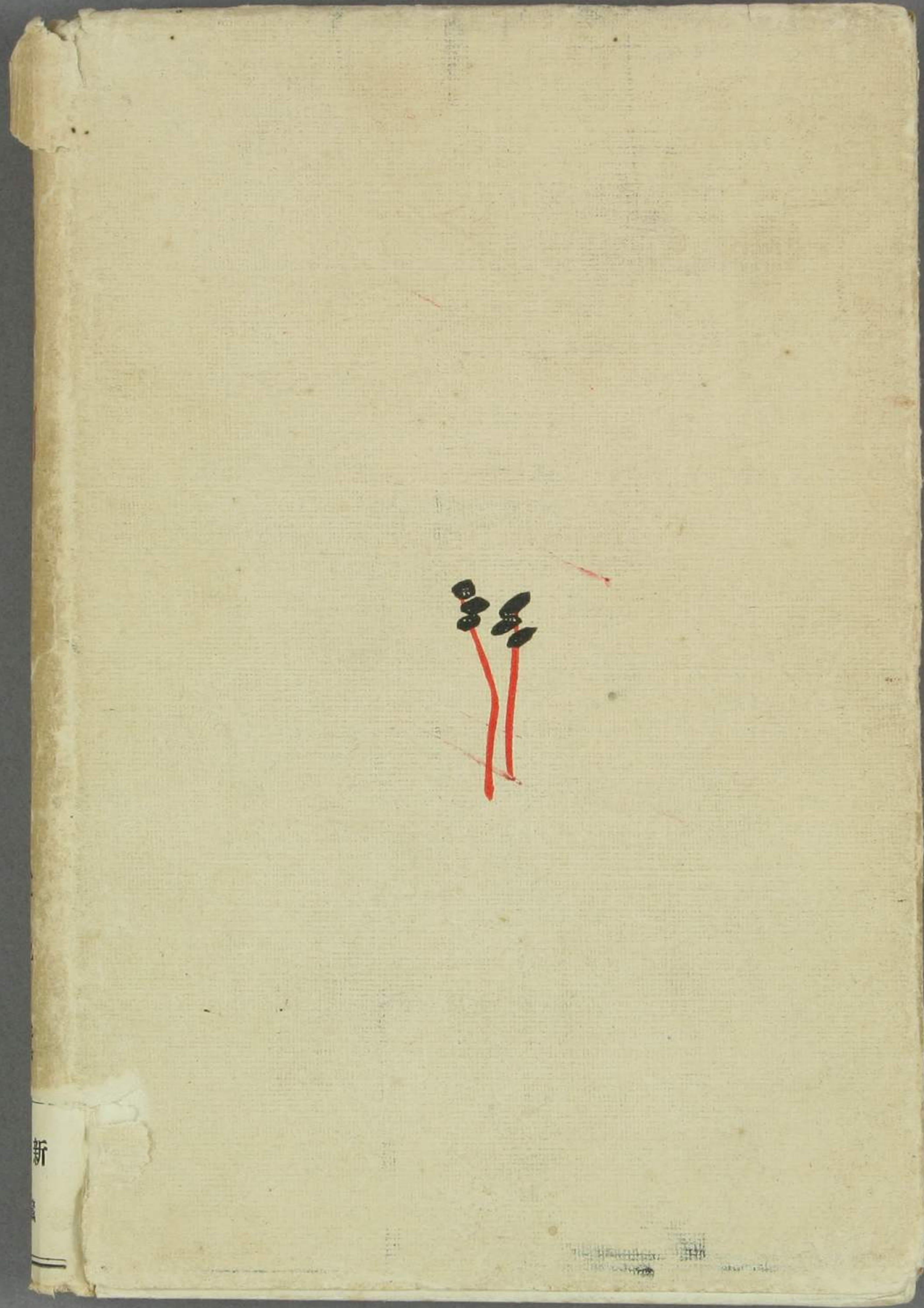
歌集

山河

金子薰

新潮社

藏版



新

集 歌

河 山

園 薰 子 金



版 藏 社 潮 新

歌 集
山 河

金 子 薰



5

10

15

20

25

30

河 山

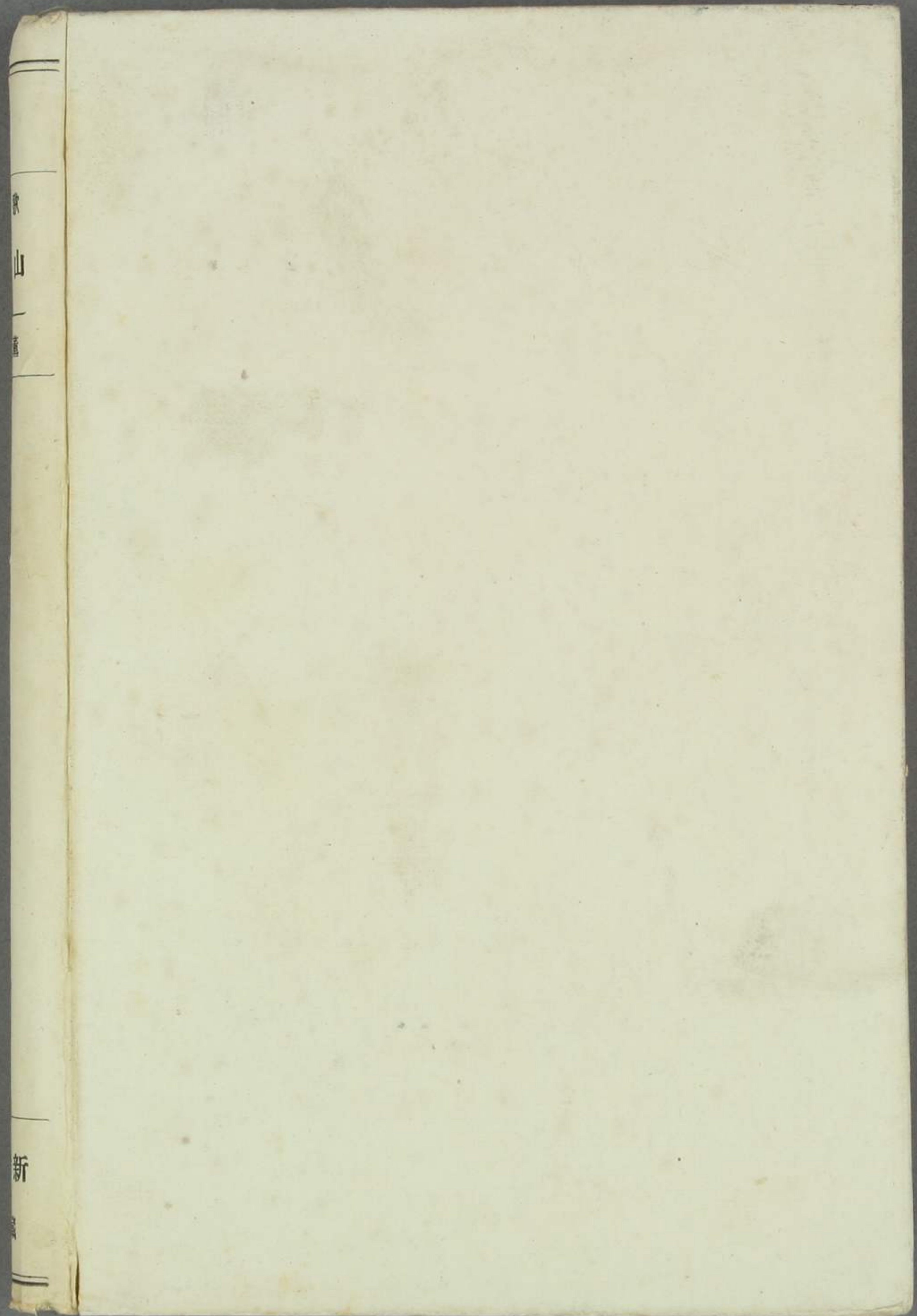


社

歌 集
山 河

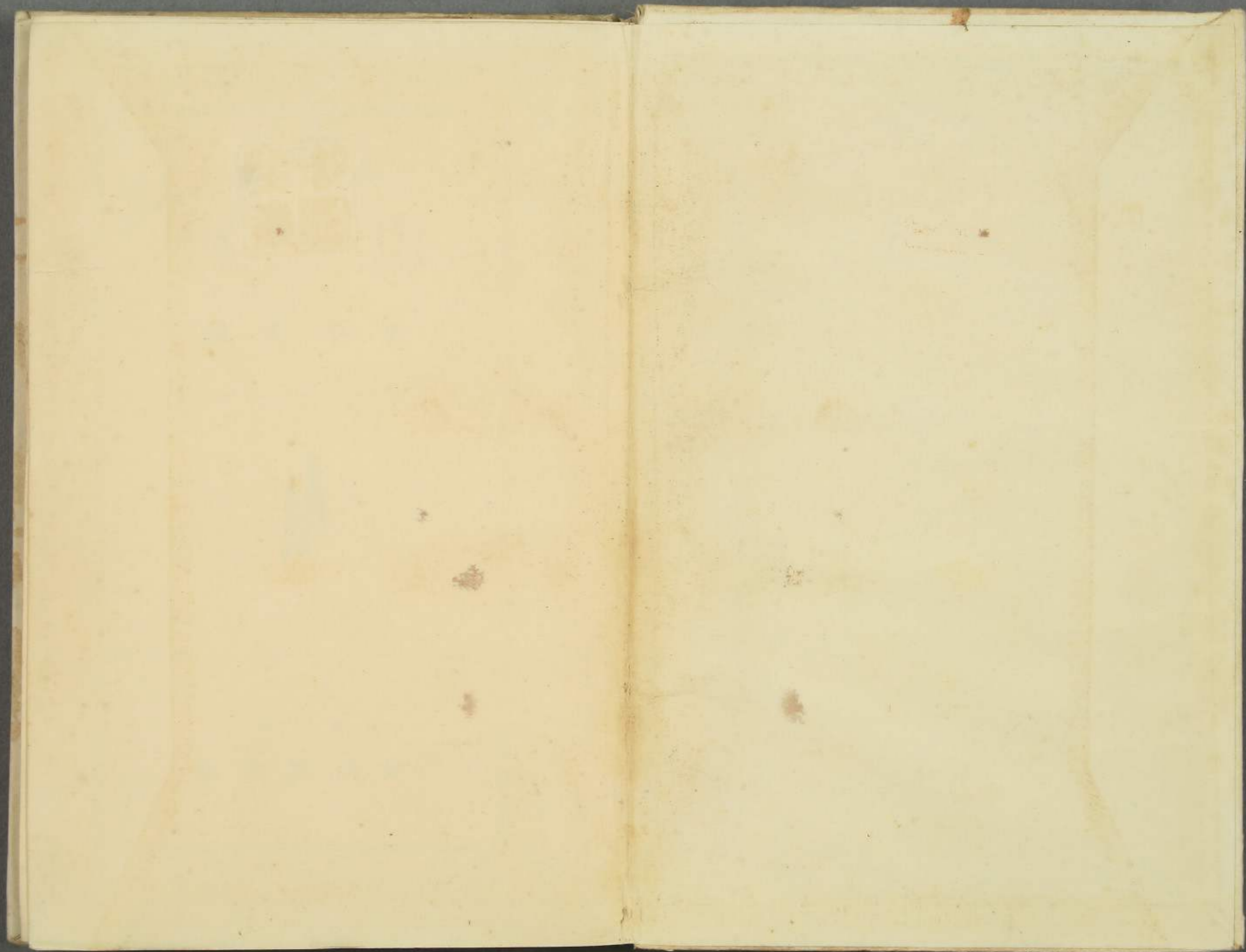
薰 園

新 潮 社
藏 版



山

新



集 歌

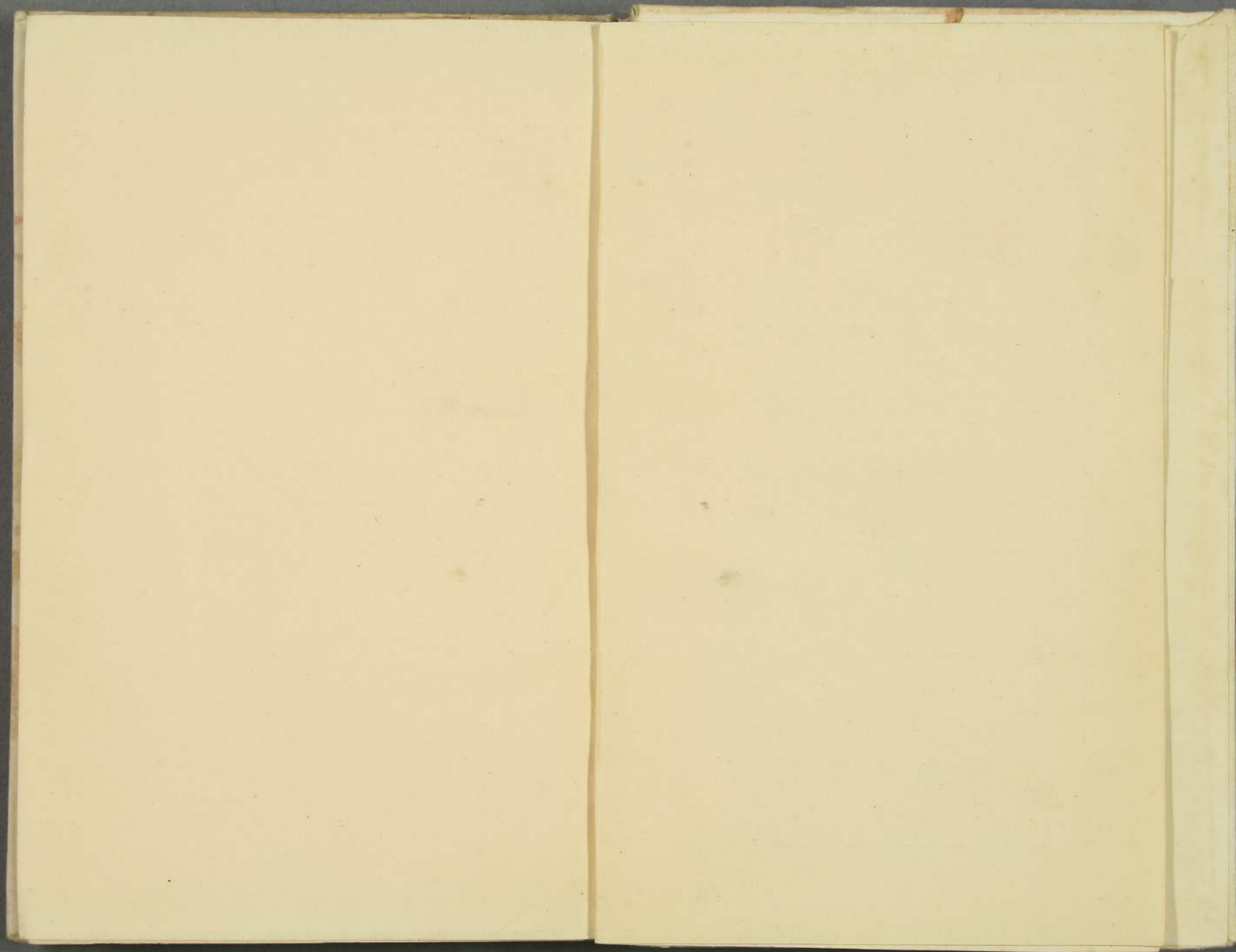
河 山

園 薰 子 金



京 東

版 藏 社 潮 新



山
河

金
子
薰
園

晩夏の京都に入れば蒸すごときあつさの中
の青き山河

目ざむれば絹蚊帳の外そとの青山あをやまの山やまぎはあか
み京の日は出づ

三階さんがいの藤椅子ふとういすにより霧白きりしろき四方よもの山やまべのあ
かつきを見る

寺々てら々の鐘かねさやかにまくらべにいたる初秋しよしゆ
の京の朝かな

ならばしのごとく目めざめぬ花賣はなうりの白川しろがはいで
て来る朝明あさあけけ

花賣はなうりのすいしきこゑの玄くろみ來り寝たらぬ腦なう
の玄くろきりに痛いたし

秋かせにふるき京都の町をゆく旅人の眼の
鈍き晝かな

日傘さしてわかき娘も並び見る布さらす日
のあつき加茂川

加茂川の柳くろみて秋すでに川原の草に見
ゆる風かな

牛のゆく白川道の水車かたりことりと暇あ
るかな

天龍寺の屋根の瓦に秋かせのわたるを見つ
つ半日を消す

如意嶽に大の字點火り初秋のまづかなる夜
の京はどよめく

あつくるしき紅べにがら色の家いへ並ならの角かどをまがれ
ば柳やなぎの見みゆる

京みやこなまりかろくすべりて水みづ茶屋ぢやの提灯ちやうちんの火ひ
の紅あかき夕ゆふぐれ

夕ゆふぐれに祇園ぎんをよぎり見たる子このくつきり
と秋あきの灯ひに浮うぶかな

下加茂しもかものの森もりをあゆみて木洩きもれ日ひの黄きなるを
見れば秋あきとおどろく

黒谷くろやのかなしき君きみの墓かぶを吹ふく一ひと生よの後のちの秋あき
かせのこゑ

萩はぎいまだ咲さかず寺内てらうちは秋あきの水みづ打うちちたる如ごとき
まづけき朝あさかな

花賣のいでたるあとの白川の道秋冷ゆる朝
のさびしさ

こゝに来て君を生みたる山城の天地見れば
なつかしきかな(以下、竹内栖鳳氏を訪ひて)

秋高き二條の城のまぢかなる二階に君とあ
ぐる杯さかづき

話なかばオルガン鳴りて窓外の高き芙蓉に
秋かせの見ゆ

夕さりて窓かけ引けば眼に入れる百日紅の
白き花かな

西の京の秋をながるゝ川々の瀬音をおもひ
君をおもひぬ

初夏の葵あひひまつりのころに來こむとばかりいひ
て別れ來にけり

わが加へる夜汽車よぎしゃの窓におくり來し人をさ
びしみわかれかねつも

ましろくも涙の色なみだのいろのてる頬を夜あけの汽車
にさめておもひぬ

今日の雨に紅べに殻がらいろの塗ぬりの戸の内うち玄くろめやか
に君こもるらむ

かへり來て二日三日はまつはれる旅のこゝ
ろのなつかしきかな

汽車くるま著つける夕日ゆふひの中の關が原かの山々の秋
をかなしむ

加茂川のやなぎのかげの氷店ミルクセーキ
をよく飲みしかな

からだぢう熱あつに浸りてわがあたり渾沌こんとんとし
て暮るゝさびしさ

硝子窓にうつる木の葉の黄きなる色わがおと
ろへの眼とあへるかな

西の國の梨を描けるおくりもの熱あつき額にふ
れまくおもふ

病みふしてつくづくおもふ病みふせる間は
せめてほだしのがれむ

そことなく木犀の香かぞかをりくるわれ病み
てより幾日へぬらむ

雨つゞき障子の紙のまめれるをこゝろ貧しく見つゝ病みふす

病牀に匍はひ來りたる青き翅はの小さき蟲をあはれみにける

のみさしの洋杯こっぶの乳に秋の朝の障子をもる日の映うつろへる

今日は病やゝこゝろよし曾て見し青き山河
眼にうかびくる

病みあがり町に出づれば秋風の白く砂あげ
わが瘡せを吹く

*

秋風吹く庭の落葉を音おとさせてあそべる鳥の
数の加はる

藤棚の下に山羊飼ふ獨身の人のやつれの玄
るき秋かな

風の日の黄なる夕陽の落ちゆける原のあな
たになだるゝ芒

夕風は芙蓉にそよぎくれゆけりありし心も
見うしなひぬる

海遠く空澄みわたる新秋を埠頭に立ちて望
み見るかな

わがこゝろ潤ほす如く初秋の雨そゝぎ来て
霽るゝ夕ぞら

秋來るこのおとづれのおごそかに口を噤み
て空を見るかな

いくぢなくわが神経のよわり来て秋風の前
に涙とゞまらず

鹿の音をきかばや山の秋霧に旅のころもを
そぼぬらさばや

島廳たうちやうの白壁＊のいろあかるくも大海おほうみの青あをと相
うつる秋

船造る工場こうばより來る斧の音の海にひゞきて
高き秋かな

こゝろよく船をあやつる漁人ぎよじん等の生活を見
る秋晴あきはれの海

細き腰二幅ふたのにおほひ秋でりのあつき島曲しまわを
をとめごの行く

秋かせに島の司つかさの娘こといふが加ぐろき髪を
なびかせてをり

篝たき焚き銅ど鑪らがねをうつ島人しまびとの祭まつりの夜よるのまら
むさびしさ

芭蕉ばせうふく初秋しゆきうかせに童謡どうたうのこゝかしこより
起る夕ぐれ

旅籠屋りゆうどうのはなれを洩るゝ火を尋もとめて熊篋くまかぶ鳴
らし來くるは誰たが子こぞ

戸かどの隙ひまよりもるゝ女の黒くろき瞳めのものいふ如
き夜のけはひかな

昨夜よくのこと婢をんなに問とへばうち笑わらふくづるゝ如
くうち笑わらふのみ

*

落葉するころともならば武藏野の天地あめつちいか
に哀かなしかるらむ（以下、菱田春草氏を悼みて）

あたらしき果このみを割さけば君が繪のにほひふと
して來るさびしさ

新しきわが國の繪の進むべき路みちを照して逝ゆ
きし君はも

かりそめに木傳こづたふ鳥の生活もこまかに君は
見給ひしかな

秋かせに君なしといふその事の大いなる繪
にわたる哀かなしみ

多摩川の川原に立ちて暮れぎはの遠く明る
き山脈やまなみを見る

ましろなる多摩川石をてりかへす秋の日寒
く水に沈みぬ

路一すぢ川に出づればをちこちの疎林の色
の薄紅葉せる

藍色の水をはさめる秋の日のひろき川原に
そよげる芒

路たえて芒わくればほそぼそと多摩の岐れ
の水澄みて行く

草山にのぼれば秋の一すぢの多摩のながれ
の白きをちかた

草山の赤松が梢に鳥啼けり木の根にひとり
われの憇へる

こすもすのそよぐ茶店の土手下の川原にあ
そふ二羽の鶏にはとり

水邊の寺より撞ける鐘の音の芒の中に消ゆ
るさびしさ

多摩川に流す燈籠黄や赤や白きみぎはの石
にうつれる

假橋のゆらりゆらりと薄宵の水にうかべる
燈籠を見る

鷗とる鳥羽はの浦曲うらまの秋の日の砂地すなぢの舟に君
の倚るらむ（旅なる栖鳳氏に）

君のせて敦賀つるがに向ふ舟ならむ晴れたる海に
煙ながるゝ

*

秋來ればとつぎゆくてふなまめける人の假
寢を次の間に見る

次の間をかへりみつゝもその母は子のまど
けなさ殊更にいふ

えりあしの白きに蠅のとまりぬつくづく
見ればうら若きかな

嫁ぐ前の女の胸のやすからぬうつくしさな
どそゝろにおもふ

庭前のそよぐ萩にもおどろきて胸乳のうご
き透けるうすもの

柔らかく線のまるみのとゝのひし女の皮膚
の白きかなしみ

うすぬるく曇り日させる花臺はなだいのさふらん
に
ある蜂を見まもる

うらがなし鈍にぶき汽笛てきのうちひゞき雨そぼふ
るに東京を出づ（以下、常陸なる五浦に旅して）

こゝろうくかへりみらるゝ東京の空そら雲もな
く晴れわたるかな

五浦の五つの入江あゐいろの波おだやかに
松のかげする

隣國りんこくの小名をなの間の海上あひだに雨雲おこり雷鳴かみり
わたる

紺青こんじやうの遠みさきき岬みさきのうすぐもり重かさき海氣かいきを動か
せる風

大漁の鯉の腹も背も光る月夜の濱の人のど
よめき

海邊の廓をぞめく若衆の浴衣すがたのをか
しき月夜

なりはひの蟹の兒がする物真似に釣すれば
章魚のかゝり來にけり

潮風に吹かるゝ山の石楠花の花そことなく
匂ふ夕ぐれ

夕くれて繪巻の中に見るごとき一もと杉に
海の光れる

夏つばき涼しき花のうちそよぎ小松の中に
くるゝ磯かな

砂白き五浦の濱にちらばれる貝の化石の光
る夕月

蒼茫とくれゆく水の音もなく海より来る風
の涼しき

わが吸へる煙草の火のみ光りけり月夜の海
の遠白きかな

海の風、夜ふけの磯の砂をまく騒がしき時目
ざめてありぬ

海白き夜の砂路にわがかけのあやしきまで
に静かなるかな

白ゆかた宿の娘の玄なやかな手につがれた
るサイダーの色

サイダーの白き泡ふく窓ぎはに涼しき風の
海より来る

蓄音機しづかに歌ひやみにけり雨夜の磯の
ふくる宿かな

窓際のほのかに白く磯の夜の月あかりして
海風ぎにけり

松青く夜は明けゆける窓外の山と海との氣
を吸へるかな

松の根よりうねりうねりて匍ひいでし蛇の
背青く砂に光れり

すがれたる濱茄子の花の香もさびし水無月
の日の照りそゝぐかな

松山まつやまのしづくゑたゝり舟の帆のぬれたる色
に日の光りけり

雨すぎて遠き岬みさきの日にけぶる紺青色こんじやういろのうる
はしきかな

水無月のつよき日にてる常夏とこなつの濱邊の砂に
紅あかきかきげする

砂みちの松の根方ねかたにとぐる巻く蛇のうろこ
の緑青ろくしやうの色

魚の如く漁師れいしの妻のよこたはる涼みの臺の
あさき宵かな

さすらひて東下りあづまくにの業平なりひらのこゝろの如くさ
びしくも來ぬ

むらだてる松うごかして海の風鳴れる勿來なごそ
のさびしき夏かな

*

○音もなく春はくれゆく後方しりより新樹しんじゆのみど
りうちそよぎつゝ

口つくれれば酒のにほひも苦にがからず暮春はしゆんはも
のゝなつかしきかな

あたふたと樹陰こかげの椅子に身を投ぐることあ
り春の暮れゆくこのごろ

塀外ひそとの赤土にさく白つゝじ薄きかげある午
後の日の色

夕されば青くいきする燈臺の灯ほかげに海の
しづかなるかな

海邊の石がけの上の青草あをぐさに晴れたる夏の日
の光りかな

静かなる心の中にいさゝかの動搖どうごうもあり五
月のぐわつこのごろ

鐘詰かねづめのミルクの腐るにほひなど厨くりやよりする
五月ぐわつの夜の雨

青みわたる垣のあなたの隣り家の楓の奥に
さく花のあり

土ならし花畑つくる少年せうねんの白き額に汗あせする
初夏

青き風青桐あをざりを吹く初夏の朝の机の軽き手ざ
はり

病む鶏うりの皺しわ枯れこるるに啼うく真まひる、氣きになり
てまた縁えんに出でて見る

わかしてふ倚よりどころなき生命せいめいのくづされ
ゆくがごとき暮くれ春はる

久々に無聊むれうを感じ本箱ほんばの蓋ふたとればする樟腦しょうなう
のかをり

木斛もくかくの芽めざしあかるく初夏しゅげの光あみなぎる青あを
の大空

わが若わかさ傷きずつけられじとばかりに自ら守まもり
來きにしさびしさ

ぼうと鳴なる汽船きせんの笛ふえの耳みみに入る港みなとのひるの
わがねざのかな

うつとりと旅館りやくわんの晝の二階より煙あげゆく
船をながめぬ

二階より汽船の往來ゆきき見てあれば夕さり來り
蜩かなくの啼く

日の光り青葉を透すきてちらばれる兎の餅もちの
白き晝かな

水無月の芭蕉葉の上の日光にちくわうを時にうごかす
風のおとづれ

顔よせて吸入きふにふをする病人やまうとの湯氣ゆけにまとれる
亂れたる髪

うつとりと疲れし眼まみをふたぎある病める妹いもと
を見れば悲しき

手の瘡せのいちじるしくも見えて來ぬ白き
寢床のうすらつめたし

日に光る青桐の芽を眺めつゝ病むとしもな
き黒き腫の色

山の手の暗き厨くりやに水がめを搔き出す音のさ
びしき夕

黄の埃ほこりつもれる河岸の物揚げ場春のやなぎ
の青々と伸ぶ

水赭あかく鐵氣かなながるゝ裏川に春の入日を立ち
つくし見る

くづれたる崖の間をうちつゝる青く小さき
落の葉のむれ

松枯れて蔦のわか葉に微風ある春くれ方の
さびしき門かな

人を見ておどろく猫のふりかへるとある垣
根の春の夕ぐれ

高き樹の風のあつまり吹きつくる小さき家
の山ざくら花

寺の門入れば一すぢ見えわたる御墓の木々
に春鳥の啼く

木瓜の花その温色のたゞよへる墓くまなく
も春の日を浴ぶ

ほだしよりのがれて春のくれつ方こゝろ玄
づかに郊外をゆく

移り來しをぐらき家の裏庭に蒲公英の黄の
あつまれるかな

病牀に力うすくもながめ入る室のすべてに
夕ぐれは來ぬ

一日の事のおくれもたまさかの病ゆるぞと
やすく寝ねける

こゝろよく眠りしあとに襲ひくる覺めし悲
哀の堪へがたきかな

幻のゆめよりさめて人々のおぼろの顔の眼
にのこりけり

草木の濃き青き野の日の色の次第に褪めて
幻覺に入りぬ

夢の中に見し雪降りのうす暗くすさまじか
りし夜よるなりしかな

夕ぐれの暗き木立にひとすぢの線せん投げてつ
と鳥のかけ入る

霜ばしらかひなく朝の日にくづれむらむら
あがる水すゐ蒸氣じょうきかな

土あげて露つゆの臺たいもゆ切きり株かぶにおなじ青さの芽
をふけるころ

山中のいでゆにひたり春の日の流るゝ戸と外と
の鳥をきくらむ

海道かいどうの月明らかに波白なびき千本せんほん濱はまの松ばやし
かな

海荒るゝ夜ぞと松間の低き家に病める妹の
夢を氣づかふ

濤の如き夜更けの風の音に聴く松の林のさ
わがしきなど

*

わが前をゆく穩やかなの足取りのある音楽の
如くひゞける

そことなく水氣だちたる春の夜のおぼろに
ふくる街の色かな

このゆふべいつも見あぐる四つ角の時計臺
より春の月出づ

煙草の火深夜の路のさびしさを微かにてら
しそひてゆくかな

西方さいほうにオレンジ色の雲いで、夕ぐれ春の雪
はれにけり

春の夜の電車の音の遠ざかりあるかなきか
もなまめかしけれ

潤へる月のもとなる春の夜の心かなしく君
に往ゆきける

夜歩よあるきのいつしか春を思はする土やはらか
き一すぢの路

立ちどまり額の汗をふと拭ふうらゝかの日
の時計屋の前

春寒く露の若葉のもゆるころ君を思へばわ
がこゝろ足る

京の山草青々と萌えいづる春の光りのなか
に君見む

さくら咲くころともならば君訪はむ君を生
みたる美はしき京

つらなれる支那の山河君が繪に大なるもの
のほしいまゝなり (横山大觀氏へ)

乾きたる空氣の中に呼吸をする植物の葉の
うす白けたり

木斛のみどりに白き埃見ゆ風しづまりし午
後の日向に

並木路のはて茫として落ちゆきし夕陽の色
の赤くのこれる

このゆふべ土手にのぼればうちつゞく商家
の屋根の寒く明るし

路ばたに鶏鳴をきゝひるころの春の感じの
中を行くかな

頬を打つ沙の風の白き夜破れ船を焚く男あ
りけり

大木の根方にいでし青き芽のなよなよとし
て風に揉まるゝ

おぼろなる君が背後の描きかけの繪絹の梓
の春の夕ぐれ

さゝやかに舌打ちすれば春寒き梢をはなれ
鳥の飛びくる

蘭の花におなじ色なる猫の來ぬこのいさゝ
かの事の目につく

透きとほる空氣の中によく見ゆる枯草原を
はしるけどもの

露の臺いづるあたりの荒れ土のほのかに春
の氣をあげにけり

春の雪乗合馬車の過ぎゆきしわだちのあと
のあさくつゞける

目の下の遠きちまたの人々の動作どうさの見ゆる
明るき夕ぐれ

褪さめてゆく夕日の名残りいと寒き常磐木の
葉の重くそよげる

*

一月の雷鳴をきゝさかづきをおきたる友の
蒼白き顔

夜の如くとざせる戸よりいなづまの酒の肴
の上を走れる

氷雨する夜のちまたをかへり來る酒にさめ
たる一人の男

かへりくればとざせる門の戸のおもくあく
る響のうちまめりぬる

さめぎはの酒のおくびの不快なるこゝろを
永く忘れざるべし

初雷の二日酔してさめやらぬ頭の底にうち
ひゞきけり

東京の街をいろどる色彩を眞白くかぎり日
夜雪ふる

雪白きかの三階のあなたより剝がる、やう
に青空となる

一瞥をわれに與へて過ぎ去りし馬上の人を
見おくる雪夜

ばさばさと雪に追はれて落ち来る青羽の鳥
の頸に血流る

柘榴の實葉なき梢にゆられつゝ風の夕にあ
はれ残り

かへり咲く李の花のいやはての一木よりす
る初冬の匂ひ

風ふけば夕日の薄き黄なる葉の重なりあひ
てさやぐ淋しさ

眼を閉ちてまた開き見ぬ冬がれの庭にはつ
ひに一草いっさうもなし

踏みしむる我が爪つま先さきの感じなき路みち上じやうの霜
の深き朝かな

逢ふほどの人みな青く栗あは立たてる貧ひんしき相さうに
冬がなしつる

冬の日の眠るが如き陰もとめえはしはそこ
に憇やすはむとする

妻をつれ子をつれ歳暮としごけの午後をゆく小役人せやくにん
等の多おほき街まちかな

めづらしく縁の日向ひなたに足のべて正月しょうがつちかき
こともおもひぬ

かくながら明日あすについかむ青く澄む大晦日おほみそ
の夕ぐれの空

ゆるやかに煙草を吹きて淡々と今宵に盡つき
る年をおくれる

あたらしき白前しろまえ垂たれの髪結かみゆひがうかぬ顔して
往來わらいをゆく

松とれて俄かに街まちのさびしさをおぼゆる日
より病をえたる

黄きなる花わが生活せいかつのさびしさにうすら匂へ
る福壽草ふじゅうそうかな

冬の日のものに飢ゑたる眼をとめて萬年青
の赤き實を玄ばし見る

赤き實の萬年青のそばの殘雪のこほれるま
まに春に入るかな

今朝の寒さまざらさむとし一本の煙草のけ
むり吹きながら行く

朽ちし葉のちりしきる夕に電燈の座敷に放
つ白き光よ

露店の少なくなれる夜の町にほしくもあら
ぬものを買ひぬる

路ひろく坦々として電車行く街のながめの
ものさびしけれ

かへり来て門前の燈の消えたるに空屋の如
き寒けさのする

齒の痛み頭の痛みうちまじり日は暮れ長き
夜は來りぬ

手をとりにて長き旅より歸り來しさびしき友
をねぎらふ冬の日

冬の木の箒をなしてつらなれる枯原に日の
うちけぶりけり

山茶花の寒きはだへと啼く鳥の透きとほる
音に初冬を知る

霜よりも白き寒けき花の色の庭の日向に
ほふ山茶花

川ばたを行ける荷馬の濃き息の青くこほれ
る朝空に消ゆ

ゆるやかに生れたる日はめぐり來ぬわが眼
の前の常磐木の花

○霜月の日向にたまる落葉の乾きたる香のあ
たゝかに來る

冬ざれの荒れたる松の樹の皮を搔きゆく猫
の爪のはしれる

黄の落ちし木立に寒く鳥ぞ啼く初冬となる
夕ぐれのところ

檜の葉の青々として眼に沁みる冬のはじめ
の霜見ゆる森

冬のけはひまゐるくも見ゆる裸木の白き霜こ
そあはれなりけれ

あたゝかき河原にあそぶ鳥の群れ一つ一つ
におもむきを見る

かへりきて街の埃の目を去らず室の燈火の
なほおぼろなり

裸木の百日紅に鴉あり冬のゆふべをこわだ
かに啼く

荒涼に目なれし庭の片すみに小菊の花を見
いでしあはれさ

丘などの黄葉林に出で入れる鳥のつばさに
夕日するころ

黄なる葉に夜風わたればさやぎあひ一片ご
との動ける光り

一帯の黄葉する木をうしろにし小さき家の
つらなれるかな

山の手の縁日の夜のうすあかく油煙の色
たゞよへる空

坂下の小さき町の縁日の夜の露店の人だか
りかな

郊外の低き工場の煙突のけむり一すぢあぐ
る夕ぐれ

湯をいで、遠き巷のこゑをきく疲れし夜の
うら安さかな

霜白き林の上の夜の空のなほあけやらぬさ
びしみの見ゆ

忽ちに風の如くもつどひ來し小鳥に黒く染
まる冬の樹

雪空のやゝに黄ばみて日の見ゆる夕ぐれ部
屋の障子開きぬ

○枇把の葉はかさりと落ちぬ初冬の音なく色
なく匂ひなき夕

○夕されば落葉くづして庭中にちらけし風の
音絶えにけり

なやましき額ひたひにせまる常磐木の梢に花の見
ゆる朝かな

赤き實と青黒き葉とうちけぶり枯木の霜の
溶とくる間あひだに

○冬來るゆふべはさびし散りしける落葉にふ
るゝ落葉の音する

じつとあれば頭くさるにえも堪へず街まちのど
よみに身を投げ入れぬ

池ふりて青くにこれる水底の金魚の群れの
うす赤く見ゆ

椿の葉暗き緑のさびしさのきはまる如き夕
べなるかな

朝の月あれたる土の霜白き五町ごちやうが程を淡く
照せり

このごろの稀れの日和に庭中の草紅葉など
わが眺めつゝ

公園に霜よけをする植木屋の煙草のけむり
ゆるやかにゆく

門入れば人なきごとく静かなる白き障子の
中に日の射す

蔓花につめたく浸り昆虫のあはれに羽の衰
へにけり

誰が家か焼けしいぬるの夜の空にあかく残
れる火の寒く見ゆ

初冬の空のあなたの朝雲の凍れる如き透け
る色かな

四つ角の枯木に靄のきゆるころ鋭く月の光
さしける

冬の木のまばらに立てる山間の夕ぐれごろ
の竈のけむり

どんよりと雪降る前の夕ぞらに翼を垂れて
鳥の翔れる

山茶花の梢の花に吸へる日のまきりにけぶ
る冬の日の朝

君去りて俄かに冬の來し如くこゝろ寒けき
風のひゅける

藍色のしづめる空のはて低う冬ちかき日の
夕ぐれのころ

午後の日のうすき築地の川ばたに海より來
る白鳥の飛ぶ

水ばたの沙をあぐる冬ざれの風にまじりて
鳥の飛びかふ

蔓草の乾びたる實に霜おける林の中の小暗
き木の根

初冬のしづかなる日に枇杷の花白くちりく
る二階の窓かな

枇杷の花咲けばさびしき香をもとめあつま
り來る小鳥の聲々

木斛の實の裂けたるにさし入れる十一月の
乾ける日かけ

そのむかし祖母おははが好みし懸時計かきどけいわが揺かせ
ば鳴りいでにけり

ふるきこの時計に時を見ることを祖母おはははわ
れに教へたまひし

セコンドのゆるき刻きざみに何とやら昔の人の
こゑのするかな

ボンボンと暗き家内うちに鳴りわたる古き時計
の音のあはれさ

*
東京の秋のをはりの日没ひづみごろやなぎの陰の
濠端ほりはたを行く

大木の根方にのこる白き日の淡くきえゆく
秋の夕ぐれ

蔓草の病めるが如き疲れたるこゝろをもと
め木の間にぞ入る

脚病みて俾くるまをかれるゆきかひの路上じやうに秋の
果はてを見にけり

長き夜のねむりにふれしものゝ果みの白きに
ほひにまた夢をえぬ

閉場はねちかき劇場裏うらの夜の路みちしづけきものゝ
亂れむとする

雨の日のしめりに青き果物くだもののそことも知ら
ず匂ひ來れり

無花果を摘みたるあとの雨つゞき秋は俄か
に寒くなりけり

さびしさに出づれば秋の野は廣く黄葉する

木のちらばれるかな

ほがらかに鳥は歌へり高き樹の梢おほかた

黄葉しにける

木斛の實となるころの秋旱りの痛かりし齒
をおもはするかな

山々に黄いろく木の葉染まりけりわが黙す
日のうちつゞくらむ

黄葉する信濃の國の高原に行きにし友よさ
びしかるべし

小諸より秋のおもひに堪へぬてふたよりに
友のおもかげを戀ふ

秋はやき山邊やまべはすでに黄葉もみぢして十月末くわつすえの霜
さむからむ

月の夜の山の黄葉もみぢのしづくする樹かげの冷
えに身をやぶらざれ

秋の日のおもひはてなし火を噴ける山の煙
も見渡しにけり

草の實のあまたつらなり秋空あきぞらを指さすくれな
ゐのうすらにじめる

晩秋ばんしゅうの黄なる夕日のうすれたる名残りの空
に雲のうかべり

秋の日の山の煙の立ちのぼる遠きあなたの
一ひらの雲

乾きたる空氣 玄めらし 晩秋ばんしゅうのゆふべの土に
枇杷の花ちる

黄なる葉に 夕ゆふ冷え 冷えと 迫りきぬ 林の中の
きはまれる 路みち

白々しろくとはてなきものゝ 明らかに 秋の夕べの
大河おほかほは行く

夕つゆの 蔓草つるくさなどにむらがれる 林の奥の大
木のもと

月光は 香かほかに路をてらし けりひとり 愁おもひて
いづくにか行く

樹がくれの暗よりいでゝ 時に見るめざむる
ごとき月の夜の原

仰ぎ見れば月天つきぞらにあり家いで、遠とほきに來くれ
どさびしからぬかな

白くして遮さやるものなき一すぢの月夜の路
の遠くこそあれ

無花果むげうの熟うれ裂けたるに月かげの青く沁しみ
入る夜よるの色かな

青黒く路に垂れたる柳の葉音はねなくかなしく
秋はいぬめり

雨水あめのさびしくゑみて庭土にはつちの秋草の根をう
るほしにける

秋かせに月見草つきみくささく、一輪いちりんの黄きのかなしみの
くらくなりゆく

手にするに動きもやらぬ大いなる金魚の死

のあはれなりける
背をならべ雨に打たれるくれなるの金魚
の群の尻尾のうごく

待ちしこと皆過ぎ去りて秋まさに暮れなむ
とする寂しき日かげ

※

秋かせに天地長くひらけたりわが一人のか
げのさびしさ

初秋の薄暮の街の白けたる一すぢ路をかへ
りゆくかな

病ありいねてある間を雨つゞき城の東は水
にひたりぬ

大水のおそひ來れる音遠くまくらもたげて
きく夜つゞけり

友のすむ門の松さへ浸りぬと話の如きおと
づれの來る

瓦斯の燈のともらぬ夜の街の色にごれり水
のあとのさびしさ

水の上にたゞよふ町のもしびの永くかな
しく眼にのこるらむ

水ひきし河原の砂に貝殻のうすき日を受け
白く光れる

水ひきしあとのされたる路ふみて浸りし家
に君かへるらむ

水あとの壘の上を船むしの這へるあたりに
日のちらばれり

君がとる酒杯こづがに這へるこほろぎに水あとの
夜の月蒼あをくさす

断えてまたつゞく雨中うちゅうの蟬の音をこゝろ寂
しくきく夕かな

蟬の音は森のあなたに遠ざかり強き夕べの
雨に消えにけり

秋風は白き葉うらの道草をひるがへしつゝ
遠きにいたる

月淡くいつしか秋をもたらせり空あふぎつ
つ川端かはたをゆく

黄に染みて葉摺れことなる朝風に秋かなし
くも見えそめにけれ

初秋に死なむといひて死にませし祖母おほはが忌
の九月は來にけり

蘭の花萩の花などみな君がこのみし花に秋
風のふく

祖母おほは君きみのおもわの色の透きとほる白さをお
もふ秋の朝かな

秋來る窓を越したる雑草ざうそうの黄ばめる花に露
のうかべる

芙蓉の花そのあかるみの寂しさに心をよせ
て玄くろばしたゝすむ

「維盛」の劇見てかへる水ばたの夜の鐘の音の
あはれなりける

秋風に赤く裂けたる無花果の雨のたまりに
うつるさびしさ

霧はれて明るくなれる原の木の葉の重なり
のひまあらく見ゆ

大銀杏ひと葉動かす秋雲の晴れたる下に黄
なるまづけさ

興もなくわが走らするペン尖きに夕べの色
のにじみより来ぬ

書きやめてもの疲れ見る紙の面に残れる白
の哀しき色かな

平凡の歌よむ人の庭に咲く淡彩色のくさぐ
さの花 (以下、或る時のノートに)

自らを嗤^{わら}へる歌もよみえざるこゝろ臆せる
歌人なりけり

鳥のこゑ木の葉のそよぎ歌人のこゝろわけ
なくものに親しむ

刺戟なく住めるみやこの片ほとり空の高き
に秋を知るてふ

牛込の見^み附^つのやなぎ雨ふるに似たるまづれ
もよしと歌へり

無花果の葉^は陰^{かげ}にすゑし椅子にゆき汗ふきて
おもふ朝よりのこと

とゞこほる心平野をゆく水の流れを遠く眺
めぬるかな

疲れたる足引きずりて來し川原月見草さき
風のそよげり

木陰なれば秋海棠のつゆの干ぬ八月はじめ
の晝のしづけさ

かりそめの事なしはてしのみなるにさびし
く心足らへる夕

朝風はまづおもむけり唐あやめむらがり咲
けるそのひと莖に

昂ぶりしかんなの紅もいちやうに月夜の庭
の花の玄とれる

しづまりて一葉うごかぬ夜の如き木深き庭
のあけくれをめぐ

横の木の並み立つ庭の夕ぐれのまげみに來
りひぐらしの啼く

風ふけば水引ぐさのうちそよぐ垣根をもる
る灯のながれかな

一簾の風うごかざる夕ぐれに眠れる如き家
のむなしさ

かゝやける藍色の空にそびえたつ一もとの
樹に日のあつまれり

水草のむらさきの花よくそよぐ淡き川邊の
夏の夕ぐれ

燈^ひを消して寝^いねむとすれば雨白く更けし外^と
面^もに走り來れり

こすもすの素^す直^なに青くのびゆける庭地^{にち}ぬら
して雨來る朝

たまりたる水に青葉のうすぐらく消えがた
きものゝあはれをおもふ

移り來て旅中^{りちゆう}の如きさびしみのはかなく胸
を去りやらぬかな

雨の日のさみしき胸にうちひゞき枇杷の古
葉の落ちかさなれる

枇杷の果^みのあかるみゆくを眺めつゝ雨霽れ
し朝の風に吹かれぬ

夕かげのまげくなりゆく庭の面に猫の白きがふと浮び出づ

引越の車の上にはみ出せる洋書の徽の白きさびしさ

やすからぬ旅より旅にゆく如く梅雨の中に家をたづぬる

黄に熟みて落ちたる枇杷の數知れず人目かれにし庭のさびしさ

しばらくは自ら卑く草深うとさせる君が戸をたゞきける

草山にむらがり咲ける待宵のあかるき色を見にゆく夕

こゝろよく蔓つるのたぐひのまつはれる垣そぼ
ぬらし夏の雨ふる

杜もりに行けば月見草さく、夕ぐれの乏しきこゝ
ろ満すばかりに

初夏の風のながれを倚りて見ぬ原のまなか
の大木たきのかげ

曇る日のわか葉の色を動かして雨こまかく
も降りいでしかな

またしみて來れる青き河のほとり、あかるく
風の水わたりゆく

蜂は巢をつくると永き日も倦まず、わか葉や
うやく濃こきかげをなす

こゝろなく眺むるほどに蜂はその巢のいと
なみに瘖せほそるらし

朝の靄おもくかゝりて榛などの梢のわか葉
雨あるごとし

こゝろよく初夏の野を風わたる、おぼえずわ
れは走らむとせり

いと淡きつゝじの花の色彩しきさいは青草あをぐさの野にと
とのひにけり

大木のわか葉のまげりつと亂れ四五羽の鳥
の目に動きける

こゝろ今わかしとわれをはげましぬ新樹しんじゆの
色にみちびかれつゝ

暗くくらく心次第にかたむきて消えなむと
する日の光りかな

青草は初夏の日にうるほひて野はなめらか
にはてしなきかな

初夏のみどりのはてをめぐり來しつかれし
風の額かぶにふれけり

一椀のうすみどりなる茶の色の新たに胸を
うるほせるかな

晴れやかにわか葉しげりて日の光りみちわ
たりたる野に眼を放つ

音もなくいたれる雨のまづけさのわが哀かなし
みにひゞきぬるかな

*

ほそぼそと夜の蛙の啼きつゞく四年住みに
し大久保を去る

かゝやかに迫る新樹を見かへりて戸山が原
に遠ざかりゆく

移り来て庭をおほへる枇杷の葉にをぐらき
室を哀しくも見ぬ

うすぐもる日のみつゞける晩春のさびしき
庭に金雀枝を植う

花落ちてけぶれる如きものゝ果の青黒き枇
杷の葉がくれに見ゆ

石路の葉に朝の雨聴き村住みの昨日のこゝ
ろ遠くともなし

鈍^{おと}ましくなりし心のあはれにも市のどよみ
をよそにのみ聴く

快^あ々と來りし野べのわか葉かげ、慰められて
しばし憩へる

玄めやかにうるほへる朝の風うけて榛のわ
か葉の軽くそよげる

かゝやきて若葉の色の眼を射ればこゝろ弱
くも額^{かぶ}に手をあつ

つゝじの花、黄^きに色褪^あせて新緑のうすくらが
りに眠れる如し

原^{はら}中の四年^{よとせ}の歌の詠みどころ橡^{くわ}の大木^{おほき}は青
葉しぬらむ

わかれかね戸山が原の新緑に小鳥の如く栖
を玄たひ來ぬ

朝風にこゝろ軽くも追はれ來ぬかの原中の
みどり葉の見ゆ

かなしき日さびしき日のみうちつゞく梅雨
の空の風の重たき

朝見れば涼しき夜に花咲きしふらねる草の
うちそよぎけり

さびしくも杜若かきつばたなど植ゑて見ぬはづかに雨
のはれし夕ぐれ

青々と梢しげりて庭の木のあかるき中に蜂
のうなれる

思ひみだれ常のこゝろのあらぬ日も夕され
ば家に歸り來りぬ

あはれなる旅商人たびあきうどの群に入りゆくへも知ら
ず人はなりにき

日に光る青葉の中に迷ひゆきさびしき我を
かへりみるかな

青々あをとわか草伸のぶる野にいでゝ夏ちかき日
の風を見にけり

あはれこの春くるゝ夜のふけゆくにさみし
く犬の遠方をるかたに吠ゆ

春くるゝ夜のはかなさのかすかなるひゞき
となりて胸にかよへり

夜となれば雨あたゝかくそゝぎ来てこのご
ろ夢のすくなかりけり

ゆく水のあかるき岸にさくら草さくら九輪草りんなど
こゝろよく萌ゆ

春の湯の宿のしづけさ軽くゆり爪切る音の
隣室にする

椿ちるそのくだけちる花びらのさみしく夢
をさまさむとせり

春の夜のそゝろありきの安けさに遠くも家
を離れ來にけり

何ごともおもはず土手どての草ふみて夕ぐれ淡
き町の灯ひを見る

うらやすきねむりよりさめ出で、見る青木
が原に靄のふるなり

春の夜の悪酒の酔のさめがたくねもせで白
き朝をむかへぬ

花いまだ咲かざる木々のやすらげき夜の下
かげにさまよひて来ぬ

のどかなる春に逢へれど、みづからの心やし
なふ目もなかりけり

風いで、高く林の鳴る音をわりなく春の晝
にきくかな

夕日すでに草にかげりて春の野の林の遠に
靄ののぼりぬ

芝原は青みわたりにて春の日の光しづかにた
だよへるかな

野の木々は白くけぶりてわが行ける一路ほ
のかに月の照せり

わか草をわたれる風の新しきひゞき軽くも
耳にきたりぬ

日の光やはく沁みくる眼のうちにをぐらき
影のふれて去にけり

雨多きかの海國のたそがれの磯草の香を戀
ひわたるかな

ものなべてよき意味にのみ解しぬる人の心
をさびしみにけり

見ゆる彼^かのあかるき方をおもひつゝ心むな
しく行き迷ひけれ

新しきこゝろの匂ひ嗅ぐ如きこの路^{みち}ばたの
ひと莖の草

遠き樹の梢けぶりて野の人の鍬上げおろす
のみの動ける

馬しきりに野のわか草を食^はみてあり春の光
りののどかなるかな

あかつきをおぼえぬ春の眠りよりもの愕き
にさめむとぞおもふ

沈^{ちん}丁^{ちやう}花^け雨しめやかにいたる夜の重き空氣の
なかに匂へり

人遠くまたしみ來る如くにもこの夕ぐれの
靄のひゞける

朝ごとの椿の青あをに目ざめぬるならひの前に
花の見えくる

春の日は椿のかげにかくれたり、ものはかな
くもなれる夕くれかな

白壁にむかひてあればわが胸に不安あふの影の
ひろごりにけり

えり寒うさむれば頭なやましくわびしき夜
半の風の音かな

春かせは街まちをわたりぬ人々の歩むうしろに
塵のあがれり

公園のベンチによりて春の日の疲れし色に
落ちゆくを見ぬ

うごめけるいきものゝ眼に映りたるものゝ
象かたちをうたがひてみぬ

いきものゝなべての顔のわが前にうかび來
りて眼のいとまなし

あふごとに哀かなしき夢をくりかへす君にこゝ
ろの弱くなりけり

雪路ゆきみちのこはれる上をふきわたる夜風よかぜの中に
月落ちにけり

わか草の上うづたかく雪ふりて春やはらか
うとざゝれにけれ

雪あだかも晝より霽れてささりげなき彌生の
空のあたゝかきかな

あめつちに萌せる春の氣を冷しひねもす雪
のしげく降るかな

春の夜の風にうごきてくらき室の柱の鏡白
く光れり

馬遠くいなくこゑののどかなる野は平ら
かにわか草の萌ゆ

こゑ遠く鳥のうたへるあたりなり梢に白く
花の見ゆるは

椿の葉月をうかべてまづかなる春の夕べの
夜となりにけり

夜の色のまづかに来るさみしさをこのかへ
るさの路におぼえぬ

みづ枝^えちす青木に見ゆるくれなるの實^みの聚^あ
まりの強く眼を射る

相見れば世のつね人^{びと}に過ぎざりき花の白き
をあはれとぞいふ

さびしくもひとり別れてかへり來ぬ草の裏^{うら}
葉^はのうらがへる路

この川の葉ざくら陰^{かげ}の夕ぐれに流れを趁ひ
て涼しく來にけり

*

病める兒のうつとりとせるわが前の電車の
中の秋の日ざしよ

その顔のいだける母にいきうつし同じ口し
ても言へるかな

兒らしきふくらみもなき頬の肉の大人の如
く見えていぢらし

母の手にいつか寝入りぬ俯向きに垂れたる
頸の細きあはれさ

發育のわるきかぼその兒が手足撫でつゝ寝
がほ見まもれる母

つと入り来て釣革をもつ母娘づれ、前の病兒
を見むともせざり

玄ばしの間も芝居ばなしをつゞけるし母娘
は立ちしまゝに降りゆく

終點しうてんに近づく時にふと見れば病兒も母もね
むりにぞ落つ

あはれこの電車の中を家とするさびしき人
のいぎたなきさま

晩秋の川のやなぎの黄きなる葉のみだるゝ方
に誘さそはれてゆく

いつまでも病兒の顔の目の前の枯草かれくさ路みちにち
らつけるかな

枯草の中より鳥の飛び立ちぬ、かなたに見ゆ
る水の一すぢ

こゝまでは電車のひびき聞え來こず、ととと
風の草原くさほらを吹く

十月の曇る空より日光射し果あかるき樹木の
見ゆれ

※

新建ちの親の家をばたづねゆく巢鴨の里の
薄もみぢごろ

黄葉せし林の中のあたゝかさ小さき弟の出
てあそぶかな

しばし見ぬ妹の大きくなりしこと小鳥の如
くよく喋べること

二階よりもみぢ林の夕づく日きえゆくまで
のさびしさを見る

しみじみと司馬江漢の南瓜の繪さびたる秋
の日にじみける

つらなれる黄なる木の葉の風ふけばひらひ
らと眼にこゝろよくちる

枯草の見よげに黄なる色に染むそのさびし
さのつゝましきかな

晩秋の晴れわたる空のかなしけれ、ひろびろ
とわがさす目路めぢもなし

一面に冬の日をうけ去づかなる林の中に時
たま鳥なく

風遠く來り林の鳴る夜なり一人一人おもふ
寂しき人々

秋のほひわが心去りダトリヤの花のすが
れの眼にうとうとし

林よりつと白き犬走りいで秋のこゝろは脅
やかされぬ

品川の臺場の草生黄に枯れて鷗のあそぶ十
二月かな

その母はわが歌を愛で讀みしてふ子が啼く
こゑのわれにかも似る

子供なりし時のわが如ひとりゐる路ばたの
兒の頭をば撫づ

ませし口きく子の前の親の顔たるみながら
にうち笑ふかな

話しかくる女の兒こそうるさけれくみし易
しと我を見つらむ

料理屋に喰ひちらす兒をそばに見て兒と云
ふものゝつくづく厭はし

七五三の今日の祝日いはひびのものし著きかざれる
兒の街まちに満つかな

いつよりか兒をうるさくも思ひけむあさま
しく心荒あさまみゐるらし

ことさらにつくり笑ひし同情を求むる風ふうの
兒に怖れける

赤とんぼの如くつながり垣に沿ひ唱歌をう
たひゆける兒等こらかな

—をほり—

著者歌集目錄

- | | |
|--------|-----------|
| ◎片われ月 | 明治三十四年一月 |
| ◎小詩國 | 明治三十八年三月 |
| ◎俗人 | 明治三十九年四月 |
| ◎わがおもひ | 明治四十年三月 |
| ◎覺めたる歌 | 明治四十三年三月 |
| ◎山河 | 明治四十四年十二月 |

明治四十四年十二月十六日印刷
 明治四十四年十二月二十日發行

(定價四拾錢)

不許複製

著作 金子薰園

發行 佐藤義亮

印刷 山田英二

小石川區久堅町百〇八番地

東京市麹町區飯田町三丁目二十五番地

新潮社

電話(番町)二三三番
 板橋(東京)一七、四二番

發行所

金子薰園著



和歌新辭典

第四版

▼總洋布製——定價六拾錢、郵稅六錢



和歌入門

第九版

▼總洋布製——定價四拾錢、郵稅四錢

新潮社藏版

孫
子
子